

14,000kmを越え南極と交流

7日、区立天沼小学校（天沼2-46-3・福田晴一校長）では、南極の昭和基地で越冬隊として活動中の隊員と衛星中継で交流をする「南極教室」が開かれました。会場には、5・6年生の約170名と保護者などが、現地の越冬隊の一員である源泰拓（みなもとやすひろ・47歳）さんに、南極の今や基地での活動、隊員たちの暮らしぶりなどを質問するなど、およそ1時間の交流を行いました。

「南極教室」は、国立極地研究所（立川市）が主催するもので、南極での観測活動について知ってもらい、地球や宇宙の歴史、そして謎などを考えるきっかけにしたいと行っているものです。南極の気象観測は、昭和33年に始まり、50年以上の観測データを積み重ねてきました。その結果として、オゾンホールの確認に寄与するなど、貴重な資料を提供してきました。現在は、第57次南極地域観測隊越冬隊が、昭和基地で観測活動を行っています。

天沼小学校での南極教室では、昭和基地で越冬隊員として活動中の源さんが対応しました。源さんの娘さんが、天沼小学校の5年生に通っているということが縁で、今日の南極教室が開催されました。



7日午後3時、天沼小学校のアリーナには、5・6年生の児童約170名と保護者や地域の町会のメンバーなど130名ほどが集まりました。ステージのスクリーンには、源さんが映し出されました。南極の昭和基地とは、9時間の時差がありますので、現地は午前9時です。まずは、南極の様子が説明されました。この時期は、午前9時でも太陽が現れず暗闇となる極夜（逆の状態は白夜）で、屋外の気温が氷点下15度であることなど、南極の今が紹介されました。

また、代表の児童の質問に答える形で、南極にいるアザラシやペンギン、トウゾクカモメなどの生き物がいるが、人間も含め、そのすべてが海に近いところに生息していること。また、夜空に緑や赤に光る、幻想的なオーロラがよく見られること。隊員30名のうち17人が活動を支えるスタッフで、調理や車両の整備にあたっていることも伝えられました。

源さんは、「ここには、様々な技術を持ったスタッフが活動しています。みんなも一生懸命勉強して、何かのプロフェッショナルになってください。そして、社会の中で、ぜひ活躍してほしいと願っています。」と、児童たちにメッセージを贈りました。

【報道機関 問い合わせ先】

総務部広報課 TEL:3312-2111